



就任のあいさつ

熊本県 JICA 派遣専門家連絡会会長 須藤靖明

このたび、熊本県 JICA 派遣専門家連絡会の会長という大役を仰せつかりました須藤靖明です。

数年前に、前会長の赤木先生から連絡会の総会で話をしてくれないかという突然のお電話を頂きました。その御縁で、JICA 派遣の専門家の方々にお会いすることが出来ました。その時から、連絡会の専門家の方々がそれぞれの分野で高度な専門知識を生かし、第一線で海外での貢献と活躍の様子を不覚ながら初めて知りました。そのような専門家の方々の集う連絡会の会長の任を不案内な小生がお受けしてよいものかを未だに戸惑っております。

小生は京都大学で地震学を修めました。熊本へは、1965 年の 10 月に生じた阿蘇火山中岳爆発の発生機構解明という卒業研究が縁でした。この爆発の前後で、火口周辺で発生する火山性地震の震源分布と地震発生メカニズムの変化が成果となりました。その延長として大学院では、阿蘇火山の火山活動の推移を非常によく表す火山性微動を自動計測する研究を行いました。当時、今日のようなパソコンや大型計算機が存在せず、また、観測機器も市販されておらず、必要な計測機器はすべて手作りでした。

その後、研究の興味は、火口周辺ばかりでなく阿蘇カルデラや中部九州の地震活動に移りました。そのため、別府鶴見火山地域に 4 点・九重火山地域に 5 点・阿蘇カルデラ周辺

に 6 点の地震観測点を作り、中部九州の地震活動を観測してきました。この観測網は、今回生じた 2016 年熊本地震の発生域と一致しています。その研究成果の一つとして、阿蘇火山のマグマだまりの大きさと位置が求められました。

その間、文部省の在外研究員として、メキシコとエクアドルのそれぞれの火山地域での地震計測の実情をみる事が出来ました。その関係で、JICA からメキシコの火山計測に派遣されました。現在も盛んに活動中のポポカトペトル火山は、首都メキシコシティの南東にある標高 5452m の火山です。この火山が対象でした。

また、インドネシアのメラピ火山が噴火し、火砕流と土石流がたびたび発生したので、噴火後の実情と観測されたデータ解析でも JICA のお世話で行くことが出来ました。

このような数少ない JICA での活動にもかかわらず、このたび、会長の任を仰せつかり、大変大きな戸惑いを感じております。しかし、エキスパートの方々と御親交が叶えられる大きな機会と思い、これから微力ながら会長職を勤めたく思っております。

どうぞ、これからもご支援ご協力、よろしくお願い申し上げます。



退任ご挨拶

前会長 赤木洋勝

このたび、第二代園田頼和会長の後を引き継ぎ平成 18 年度以来 9 年間務めさせていただいた当連絡会会長を退任いたしました。思えば、自身の非力、力不足に加え、日頃の活動の場を県

南の地・水俣に置いていたこと、さらに JICA 関連業務等で頻りに海外に出向いていたこと等で、会の運営上ご迷惑の掛けっぱなしの連続でした。

先ずは、そんな私を長年にわたりご支援、ご協力いただいた役員の方々をはじめ会員の皆様並びに JICA九州国際センター職員各位に対し、心から深く感謝申し上げます。お陰さまでこの間、関連する様々な活動に参加する一方、本会の年次総会開催時には会員2名による公開講演会を開催、それぞれの貴重な経験や体験談を熱く語っていただき、多くのことを学ばせていただきました。また、その講演要旨とともに活動内容を「JICA EXPERT くまもと」として編集、No.13~No.22まで毎年発行し、会員はもとより、県内の国際関連団体、全国 JICA 関連団体等にも発信してまいりました。

いま読み返してみても、当時のことが昨日のように蘇り、私にとって大切な財産となりました。また、こうした活動を通して、当連絡会の運営に携わっていただいた役員各位をはじめ

多くの会員の方々と知り合い、長年にわたり親交を深めることができたことは大きな喜びであり、人と人との絆の大切さを改めて学ぶ機会でもありました。

振り返ると、楽しい思い出ばかりが駆け巡ります。これもこの会の魅力なのでしょう。長年にわたる多くの皆様のご支援の賜物と改めて心より感謝申し上げます。

今後は須藤靖明新会長のリーダーシップのもと、当連絡会が益々発展されることをお祈りして、私の退任のご挨拶とさせていただきます。長い間、本当にお世話になりました。



2016年の活動記録

2016年は4月に一連の熊本地震が発生し激動の年でした。被災した皆様には心からお悔やみ申しあげます。その中で、当連絡会は、兄弟組織である「青年海外協力協会」、「シニア海外ボランティア OB 会」、上部団体である「くまもと国際協力連合会」と一体になって活動をしてきました。

平成27年度の総会・講演会を1月30日に、熊本市国際交流会館で開催しました。

総会では赤木前会長の勇退と須藤新会長が提案され、承認されました。

総会後の講演会では、木下俊和会員による「ラオス環境産業の現状と展望」、矢原正治会員による「ミャンマー&ラオス&ネパールにおける薬用植物調査活動」の2題の熱のこもった講演が行われました（講演要旨は前号に掲載）。総会・講演会には約30名の来賓、会員が出席しました。講演会后、アークホテルで懇親会を行い交流・親睦を深めました。

7月10日のくまもと国際協力連合会総会では、宇佐川毅会員が話題提供致しました。演題は「国立大学法人として JICA 事業に参画して



宇佐川毅 会員



原口浩一 会員

2016年（平成28年）熊本県 JICA 派遣専門家連絡会、活動の記録

月	日	活動・行事等	場所
1	11	熊本県 JICA 派遣専門家連絡会、役員会	国際水銀ラボ
1	30	JICA Experts くまもと No.22、発行	
1	30	熊本県 JICA 派遣専門家連絡会、総会・講演会	熊本市国際交流会館
2	13	くまもと国際協力連合会、役員会	熊本県民交流会館パレア
3	21	熊本県 JICA 派遣専門家連絡会、役員会	国際水銀ラボ
7	10	くまもと国際協力連合会、総会	熊本県民交流会館パレア
9	10	くまもと国際協力連合会、役員会	熊本県民交流会館パレア
10	29	くまもと国際協力連合会、役員会	熊本県民交流会館パレア
12	3	JICA ボランティア・派遣専門家等帰国報告会	熊本市民会館

一工学教育分野での連携」でした。12月3日に開催された JICA ボランティア・派遣専門家等帰国報告会では原口浩一会員が話題提供致しました。演題は「水俣発の水銀分析技術協力」でした。それぞれ、講演後、あるいは懇親会で活発な論議がなされました。（和田）

大規模噴火を科学する

熊本大学大学院先端科学研究部教授（基礎科学部門 地球環境科学分野）

長谷中利昭

九州には、阿蘇、始良（鹿児島湾）、鬼界（屋久島近海）などカルデラ火山があります。それぞれが噴火したのは9万年前、3万年前、7千年前など、文明社会の歴史から見れば、はるか過去の出来事です。発生頻度は非常に低いですが、いったん起これば、九州の半分は火砕流に襲われる可能性もあり、文明社会に与える影響は計り知れません。科学はこの大規模噴火をどれだけ解明してきたかを整理してみたいと思います。

講演では、以下の項目について話をさせていただきます。

- 1) 世界の巨大カルデラ・巨大噴火のランキング
 - ― 阿蘇カルデラは何位？
- 2) メキシコにあるカルデラの巣、シエラ・マドレ・オキシデンタル
 - ― 何がすごいのか
- 3) 大規模噴火の頻度
 - ― いつ大噴火が起こるのか
- 4) カルデラ噴火を起こす巨大マグマ溜り形成の条件
 - ― 大量のマグマ生産が必要か？
- 5) 噴火できるマグマ、できないマグマ
 - ― カルデラ噴火を起こすマグマの条件は？
- 6) カルデラ噴火のきっかけ（1）
 - ― 鉱物の累帯構造からわかるマグマ注入
- 7) カルデラ噴火のきっかけ（2）
 - ― 地震断層とカルデラ外火山活動

西原村は熊本地震本震の震源から遠いにもかかわらず、震度7で大きな被害を受けました。大峰山が山体崩壊を起こし、すぐ横の大切畑ダムが漏水し、道路に断層による亀裂が表れました。実は大峰山は阿蘇が9万年前に4度目の大噴火を起こす直前に噴火した火山です。この火山から流れ出した溶岩流は高遊原台地を作り、その平坦面を利用して阿蘇くまもと空港の滑走路が作られています。大峰山噴火は阿蘇-4大噴火のきっかけになったか考えてみたいと思います。



写真1：西原村大切畑に表れた地表地震断層（露頭の高さ約4m）。



写真2：ガードレールの中がみ、道路の補修跡で2箇所地表地震断層が表れたことがわかる。

講演要旨 コース・リーダーとして海外研修生と過ごした6ヶ月間

元自治医科大学大学院准教授

田中穂積

私は平成27年6月22日から12月21日までの6ヶ月間、(独)家畜改良センター企画調整部企画調整課技術協力室業務総括者(Course Leader)として、JICAの2つの海外研修案件に参加しましたので報告します。

1. 平成27年度青年研修「農村開発」コース(第1回目)

農村開発、農事産業あるいは農業組織の分野に従事している中央・地方政府官吏や担保貸付公務員で、研修参加によって習得した技術を帰国後、組織的に発展、普及させることが可能な者が対象で、選考された研修員は27~33歳の9名のパキスタン人、研修期間は平成27年7月19日~8月5日(17日間)であった。

2. 平成27年度海外集団研修「畜産開発計画担当官を対象とした政策立案実施管理能力の向上」コース(第2回目)

畜産行政業務に関する政府関係者として従事し、研修参加によって習得した技術を帰国後、組織的な発展、普及させることが可能な人材が対象で、選考された研修員は27~53歳の8ヶ国(エチオピア1名、イラク2名、ラオス1名、ミャンマー2名、パキスタン2名、ソマリア1名、南スーダン2名、スリランカ3名)の14名、研修期間は平成27年9月30日~12月5日(67日間)であった。



青年研修コース研修員の9名



集団研修コース研修員の14名

2研修の講義は、農林水産省、家畜改良センター、大学や農業団体から各分野のエキスパートが講師を務め、関東・東北地方の最先端の畜産関連施設の視察もあり、研修生だけでなく、畜産現場から10年以上離れていた演者にも大変有意義な研修となりました。さらに、研修最後の各研修生によるアクションプランはPCM方式で作成され、発表されました。演者はPCM手法を研修生と共にこの研修会の講義で習い、研修生のアクションプラン作成を泥縄式で指導しましたが、貴重な経験となりました。

私にとって初めてのコース・リーダーでしたが、研修生のこの研修への最終評価から多くのハプニングや思い出、習得した種々の知識を得られた日本に対して好印象を持って送りだせたのではないかと自負しています。

会員の広場

この欄では会員の皆様のご活動・活躍、ご意見を掲載いたします。奮ってご寄稿くださいますようお願い致します。当号では赤木洋勝会員と須藤靖明会長の記事を紹介いたします。

赤木会員の記事は、昨年末に熊本日日新聞の「わたしを語る」欄で約1ヶ月間連載されました。下のコピーは初回のもので、水銀

とともに歩んだ赤木会員のいきざまが感動的です。暫くの間（掲載から90日間）、購読者会員になることにより全記事が下記のウェブサイトにて無料閲覧できます。

<http://kumanichi.com/feature/kataru/akagi/>

なお、熊日当欄では、過去に小野友道会員、須藤靖明会長も連載しています。こちらは有料で閲覧可能です。

熊本日日新聞 2016年11月11日付

わたしを語る

水銀は有用だった反面、厄介な代物です。利用の歴史は数千年に上るともいわれ、顔料、貴金属抽出、近代では殺菌・防腐剤や化学産業での触媒など多用されてきました。

水俣病をはじめ、水銀化合物の恐ろしさを知った今では信じられないことですが、「不老長寿の薬」として飲用された時代もありました。今も途上国を中心に金採掘に使われ、気化した水銀を吸い込んでの中毒があります。垂れ流されて自然の中で毒性の強いメチル水銀(有機水銀)に変わり、魚に蓄積されて人類への脅威が続いています。

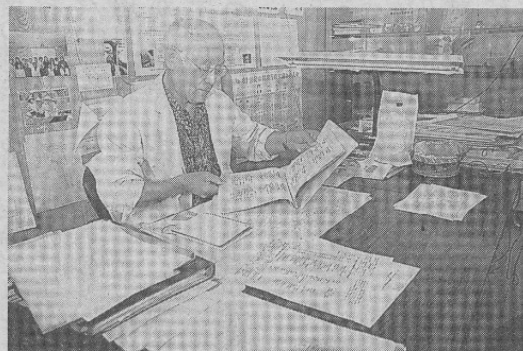
鹿児島島の金鉱山だった地区で育ったせいでしょうか。高校、大学を通じて化学に関心を深め、水俣病が公害認定された1968(昭和43)年に入った国の研究所では水銀研究に没頭していききました。初期の成

国際水銀ラボ所長

赤木 洋勝

為せば成る 成らぬは

①



水俣市袋の私設研究所・国際水銀ラボで、文献調査や水銀測定を続ける

世界に望まれ水銀研究半世紀

測定法確立へと重心を移しました。測れなければ、水銀がどう動き、変わり、どこにどう影響するかかの論議もできないからです。

果は、本来は毒性が強くないとされる無機水銀も、水の中では光のエネルギーで有機水銀に変わるこの実証でした。

それをきっかけに、有機水銀が分かる希少な研究者としてカナダの研究プロジェクトと呼ばれ、世界中がきちんと測定できずにいた有機水銀、総水銀の正確な

病研究センターに移ってからも独自の手法を磨き、最も正確な測定法の一つとして受け入れられるようになりました。「赤木法」「アカギ・メソッド」と呼ばれます。その手法でブラジル・アマゾン川流域の金採掘に伴う汚染を調べ、それがまた世界の水銀研究者から注目されて、さまざまに

際協力・共同研究につながっていききました。

3年前、水俣の名を冠した水銀規制の国際条約がこの熊本で採択され、日本は今年、締約国になりました。その背景には、こうした世界中の科学者による水銀の実態解明の努力があったことを知ってもらえればと思います。

自然界の微量のメチル水銀を正確に測定できる機関は、今でも世界中で数えるほどしかありません。私も試行錯誤を重ねました。つらいときに浮かぶのは小学生時代に正座して唱えさせられた米沢藩主上杉鷹山の教訓「為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」でした。正しいこと、知るべきことに全力を挙げた半生をご紹介したいと思えます。

(担当・本多孝)

2016.11.11



2016.9.13
活動していない断層指摘
 阿蘇火山博物館 須藤さん講演
 熊本地震について学
 ぶ講演会が11日、熊本
 市西区のホテルニュー
 オータニ熊本であり、
 阿蘇火山博物館(阿蘇
 市)学術顧問の須藤靖
 明さん(72)＝写真＝が
 「一連の地震で活動し
 ていない空白領域があ
 る」と話し、今後、地
 震が起り得るとして
 注意を呼びかけた。

活動していない断層指摘

阿蘇火山博物館
 須藤さん講演

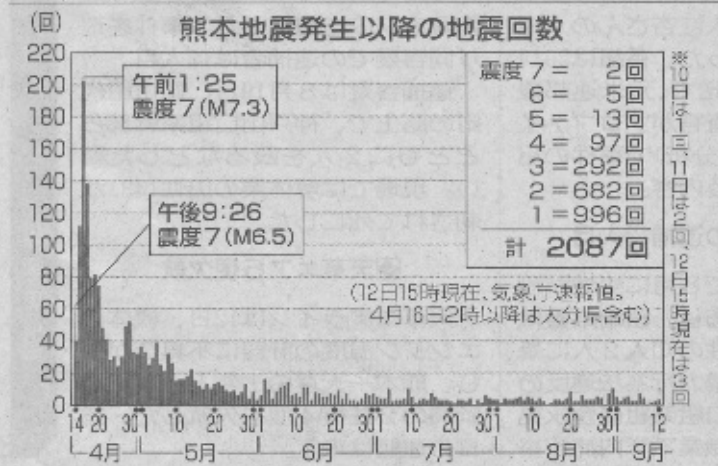
注意呼び掛け

熊本市

震の前震や本震、余震
 の震源を地図で説明し
 ながら「日奈久断層帯
 の八代市以南や、阿蘇
 の地域にある二重の峠断
 層が熊本地震と関係し
 ている可能性があり、
 注視していく必要があ
 る」とした。

指摘。警戒と備えが不
 可欠だと話した。

また、昨年11月に鹿
 児島県の薩摩半島西方
 沖で起きたマグニチュ
 ード(M)7.1の地
 震が熊本地震と関係し
 ている可能性があり、
 注視していく必要があ
 るとした。



熊本地震県内の被災状況

死亡	50人(熊本市4、南阿蘇村16、西原村5、御船町1、嘉島町3、益城町20、八代市1)
震災関連死	43人(熊本市3、嘉島町1、大津町3、合志市3、益城町3、菊池市1、八代市1)
大雨による二次災害死	5人(熊本市2、宇土市2、上天草市1)
負傷者	2,374人
建物	住宅167,604棟
避難	13カ所、503人
仮設住宅	完成 3,576戸(16市町村) 整備予定 4,266戸(16市町村)
みなし仮設	9,321戸(22市町村)
水道	断水 約800世帯

会員による最近の JICA 活動・派遣国

赤木洋勝会員 カザフスタン
 富安裕一会員 ブータン
 原口浩一会員 ニカラグア
 松山明人会員 ニカラグア
 和田 節会員 インド

(本記事は、事務局が把握している方だけの情報です)

編集後記：この「JICA EXPETS くまもと」は熊本県 JICA 派遣専門家連絡会が発行しております。2016 年は内外で異常気象が頻発し地球温暖化の影響が心配されました。また、世界をみるとテロや戦禍があとを断ちません。その一因として貧富・格差の拡大があげられました。経済成長一辺倒の施策を見直し、新たな価値観が求められているのではないのでしょうか。

今年1年、本会の活動にどうぞご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。(和田)

事務局：〒861-1102 合志市須屋 1635-107 (和田) ,E-mail: wadat520@gmail.com
 熊本県 JICA 派遣専門家連絡会平成 28 年度役員： 会長：須藤靖明
 幹事：石島 蕨、徳尾芳道、和田 節、丸本幸治